一般の部

鈴木修一選

特選

葉桜

秋田市　堀井喜代子

桜はあっという間　葉桜へ
夜の帳
賑やかな　人混み
桜を照らし出す　スポットライトも
いつの間にか　消えてなくなる
あたりは葉を揺らす
静かな　風のせせらぎ
眠りから目覚めた　蛙の鳴き声が
あちこち　反響している
　バサ　バサッ
思いだした　カラスもいたこと
赤い目の　レーザー光線がキラリ
私の心を　くすぐる
白黒変わった　日常は
宝石のように
意外と　あちこち埋まっている
私は　誰もいない公園の
葉桜を見に来た
花びらが散って
新緑となる
桜が　本性をあらわす
私は　これが　見たかった
花の命を授かって　花の命を大地へ帰す
何十年も前から
この地で　繰り返す
きらびやかなものを　脱ぎ捨て
ありのままの姿にもどる
ごつごつした根を　地上に飛び出させ
つかみどころのない今を
探し当てる
一年に一度　役を演じた桜は
千秋の舞台を降りたようにみえて
降りていない
月が照らし出す　枝の螺旋
夜空に吸い込まれていく
深い　深い　宇宙と地上の連絡網
暗闇から　今
大きな光が　生まれようとしている

〔選評〕　咲き誇る時間を支える、桜の木の営みを見つめ、愛情深く描いている。「花の命を授かって　花の命を大地へ帰す～つかみどころのない今を探し当てる」の数行の丹念な叙述に、独自の深みと魅力を感じた。ラスト「葉桜に月」の取り合わせは、「花に月」のお決まりの美を超えた「一期一会」の思いがこもり余韻が深い。

秀逸

プール開き

秋田市　工藤　光一

晴れやかでどことない不安
期待と希望に膨らんだ一学期も
葉桜の濃い緑と葉擦れの音へ溶け込むように
　坂道を登っていた七月

クラスメイトのK君が並んで
「おはよう」！と屈託なしの挨拶
思わず「おはよう」と返す自分も
元気をもらったような朝

晴れ渡る空に
ぽっかりと浮かんだ雲
袋に入った海水着とタオル
K君が元気なのは
完成したばかりの学校のプールが
開かれる日だったから

これまでは年に一度か二度位の海水浴だった
　山村の学校や家庭
それさえ自分達だけでは行けない

期待が一度に花開いた体育の時間
学校としての初めてのプールに
競う広さより自由に遊泳できる広さに歓喜し
たプール開き
やがて校内競泳大会にK君が選手として参加
　し思う存分力泳したプール
競技を終えた表彰台のK君の目は一際輝やい
　ていた
なぜかK君の成果を自分のことのように喜し
　さを隠せなかった不思議…
夏休みに入ったなごやかな活気のプール
プールサイドの向う側に立つ先輩女子が去年
より成長したのが眩しく見えた
金づちに等しい泳ぎを返上しようと向う側へ
懸命にクロールを試（こころ）みた夏の午後

〔選評〕　春から夏へ、少女の心の生長が鮮度よく描かれている。「プール開き」という題には、作者自身の心の扉の開放が重なっているようだ。先輩女子の眩しい成長を織り交ぜるところも作品に深みをもたらし、懸命のクロールを試みる少女の姿が生き生きと伝わってくる。

入選

あきた歳時記

秋田市　加藤　隆二

大蛇嶺に瑞気漲る東雲の
空押しあげて梵天祭
法螺貝の音も高らかに
杜は坩堝（るつぼ）の修羅めきて
先陣競う喚声は四方（よも）に谺し
梵天の綺羅宙に舞う

流し太鼓の囃子（はやし）にのって
濠も漣み蓮の葉揺らす
光の稲穂さながらに
夜空に撓（しな）う竿灯の
妙技くりだす大若の
滾（たぎ）る血潮の意気昂（あが）る

闇押し広ぐ篝火（かがりび）に
音頭、甚句に笛、太鼓
彦三頭巾で精霊送る
端縫い衣裳の母娘も踊り
父祖より継ぎし伝統の
厂史を繋ぐ盆踊り

藁の沓（くつ）、藁の毛羅着て蓬髪の
鬼面すがたのなまみはぎ
戸毎に蹠（あうら）踏みならし
地団駄踏んで稽（しべ）散らす
岬の里の夜も更けて
咆えるなまはげ二人（ふたりづ）伴れ

〔選評〕　秋田の四季を、緩みのない言葉で紡ぎ上げた作品で、一語一語のひびきを確かめながら読み味わった。作者の個性は詩作に大切な要素だが、我々が共有する文化や行事の価値も詩のかたちに残しておくべきものだと、この作品に触れ改めて思った。

小・中・高校生の部

鈴木修一選

特選

僕の役目

東成瀬村　東成瀬中二年　髙橋　結人

審判の前にしゃがむ
僕だけ重たい防具をつけて
相手ベンチの激しい応援
色んな雑音が僕の耳に入ってくる

僕はみんなの事を見なければならない
自分の事でも精一杯なのに
失敗できないという緊張感もある
でも僕は不安になってはいけない
みんなを不安にさせないために

投手が僕のサインを見る
そしてうなずく
少し間を空けて投球動作に入った
試合が始まる
僕の耳から雑音が消えていく

〔講評〕　一人反対を向き投手と野手にパワーを送るキャッチャーという要のポジション、その大切さがしっかりと伝わる作品です。「僕はみんなの事を～みんなを不安にさせないために」に表れている緊張感と責任感が、「雑音」を忘れるほどに試合に集中していく姿へと変わるところがたのもしく、またすばらしいと感じました。

詩　部　門

秀逸

あいさつ

秋田市　岩見三内中一年　石塚菜々美

毎朝
耳まで届く
明るく元気で優しい「声」。
この「声」は何だろう。
知りたくて知りたくて
聞き続けると
何だか心が温まる。

このぬくもりを広げたい。
一人一人がこの「声」に
新しい「声」を返せば
きっとこのぬくもりは
もっとずっと広がっていく。

〔講評〕「あいさつ」というテーマは身近なものですが、この詩は「声」に注目している点に新しさがあります。コミュニケーションの決まり文句としてのあいさつではなく、からだが発する「肉声」のぬくもりこそ幸せの輪を広げてくれるのだと教えてくれる優しい詩です。

まわりを見ると

東成瀬村　東成瀬中一年　佐々木すみれ

空を見上げると
今日はなんだか
クリームソーダを
ぐるぐるぐるぐる
かきまぜたような
白くてほんのり水色の空

山を見てみると
今日はなんだか
あざやかな絵の具たちを
しゅるしゅるしゅる
筆をすべらせてぬった
春のにおいがしてきそうな山

地面を見てみると
今日はなんだか
動物たちの足あとが
ひたひたぺたぺた
ついていて
元気に歩き出せる心がもらえる地面

まわりをじっくり見てごらん
なんてことない風景も
きっとすてきに見えてくる

〔講評〕　詩人の目をもち、空と山と地面という自然の中から「詩」を見つけてくる作者の姿がうかびます。三つの連が、それぞれ六行で書かれ、「今日はなんだか」のくりかえしもリズムを生んでいて、声に出して読みたくなる作品ですね。ユーミンの曲（やさしさに包まれたなら）が流れてきます。♪目にうつる全てのことはメッセージ♪と。

入選

さくら

東成瀬村　東成瀬中一年　**島脇　弥生**

私の名前はさくらです
この広い大地に
一本の太い足で
立っています

春に私はきれいな花を咲かせます
私は真っ白の「ソメイヨシノ」
となりは小さな「マメザクラ」
向かいはピンクの「シダレザクラ」
みんな私の友達です

今日からいよいよ五月です
もうすぐ緑の服を着ます
みんないっしょの緑色
きれいな葉桜になりました。
もうすぐ夏になりますね

〔講評〕　「ソメイヨシノ」の木になりきって、ご近所の桜ともだちを登場させるなど、とても楽しい作品に仕上がっています。「一本の太い足で」立つというえがき方の力強さと上品な語り口も魅力的な作品です。

鮮やかな色に

東成瀬村　東成瀬中一年　谷藤　里菜

夕やけはいつも違う色をまとう

黄色の夕やけ
オレンジの夕やけ
赤の夕やけ
朱色の夕やけ

今日の夕やけは何色かな？

夕やけの鮮やかな色にあこがれて
カラスが夕やけに向かって飛んでいく
どこまでも
どこまでも

〔講評〕　夕やけのバリエーションを楽しむ作者は、きっとゆたかな心の持ち主。ねぐらに帰るカラスたちを、夕やけにあこがれて飛んでいくと歌う想像力がすばらしく、「どこまでも」のくりかえしに空は奥行きを増すようです。

生き物はこう言っている

東成瀬村　東成瀬中三年　髙橋　結人

我らはチームガーディアンズ
やあ！自己紹介がまだだったね

我が名はグリーン！
宇宙の自然を守る者
そして宇宙の自然を守るリーダー
今、地球が危機を迎えているんだ
だからこの犯人を倒しに行くんだ

我が名はアリ
さっき命を失ったアリです
人間に踏まれてしまいました
死は恐かったです
でも、私の死んだ姿を見た人間は気持ち悪がった　あなたが私の命を奪ったのに……
私の人を軽く見た人間に教えてやりたい

我が名は雑草
本当は一つ一つに名前があるけれど

人間は我らをまとめて「雑草」と呼ぶ
人間は命を持っている
我らだって命を持っている

人間は邪馬者扱いされたら悲しむ

我らだって邪馬者扱いされたら悲しむ

我らは人間と同じ「命」を持つ者
そしてどの命だって同じ重さだ
人間だって、魚だって、鳥だって、もちろん我らだって

人間に伝えたい
人間に知ってほしい

もっともっと命を大切にしてほしいと
そして我らは望む、近い未来に全ての生命
が平等に終わりを迎かえる世界が来ることを

〔講評〕　人類のおごりに、ヒーロー物のタッチで批判の矢を向けた痛快な作品。虫にも、草木にも心があるという教えがありますが、今どうでしょうか。最後の「平等に終わりを迎える」とは、「平等の世界が実現する」という意味でしょうか。

東成瀬村　東成瀬中三年　吉田　桜瀬

ミッション

何気ない日常で
「なぜ、人は生きるのだろうか」
と考えるときがある

好きな人と出会うため？
美しいものを見るため？

自分の部屋の真ん中で床に寝転がって
考えてみる
目を閉じる
川の音が聞こえる
夕日の光が、目を閉じていても感じる
オレンジ色に染まって

次に目を開けたとき
時間は、ゆうに三十分を越えていた
いろいろ考えた
「なぜ、人は生きるのだろうか」
と

結局、分からなかった
いつか、見つかるかもしれないが
私の人生のミッションだと思う
答えはないかもしれないが

今日も
「なぜ、人は生きるのだろうか」
をミッションに、生きよう

〔講評〕　詩という形式が哲学する場ともなることを証明してくれる作品です。毎日の生活で「すぐ答えを出せ」とせまられる場面が多いからこそ、「なぜ、人は生きるのか」という大きな問いを持ち続けることに尊い価値が生まれ、人生のミッションともなりうるのでしょう。この問いかけが、毎日の充実につながるかもしれませんね。